



茂みを、めちやくちやに、かきわけた。

オオカミを火の海で包囲

どれだけ、森林の間を、かけぬけただろうか……。ようやく、じぶんにかえって、不安な気持ちのまま、うしろをふりかえる余裕ができたときには、もちろん熊の声はきこえなかった。しかし、どうやってそこまできたのか、方向さえ、さっぱりわからなくなっていた。ふたりは、互いに顔をみ合わせた。だが、急には、ことばがでなかった。

ふたりとも、からだじゅうのあちこちを、すりむき、そして、ひっかいていた。恐ろしさのあまり、逃げているときには感じられなかったその痛みが、急にヒリヒリと痛んできた。おれの右足の小指のつけねには、大きなトゲがささって、どす黒い血が、べっとりと、足の裏にひろがっていた。

おれたちは、不安と痛みと疲れとが重なりあって、とうとう、その場に、しゃがみこんでしまった。その足もとを、一列に並んだアリたちが、獲物を運んで、木の根っこのみ家へ帰っていく。

「ジロ、はやく帰ろう。」



るのだろうか……。

おれは、やっと、おれたちが火を燃して、オオカミの群れから逃がれ、そして、この沼のほとりで正体なく眠りかけていたのに気がついた。してみると、ベケは、どっからか、ひょっこりあらわれたのだ。

やがて、あたりがだんだん明るくなってきた。おれたちは、ガマのいっぱい生えている沼の岸べにころがっていたのだ。沼には、ウキクサが、ちょうど緑白色の小さな花をいっぱい咲かせて茂っていた。それにしても、この沼は、いったいどこなのだろう。おれは、からだを起こして、まわした。

はるかかなたから、もうもうと灰色の煙が立ちのぼっていた。おれたちがオオカミを追っばらうために燃した火が、まだ、くすぶり続けているのだろう。

おれは、まだうつ伏したまま眠りこけているジロを、ゆり起こそうとした。しかし、考えた。ジロが、じぶんで気づいて目をさますまで放っておくことだ。

「ベケ、おまえ、どっからきたんだ。さあ、これから村へ帰るんだ。おまえ案内するんだぞ。」

おれは、ベケの目をのぞきこんで、そういった。ベケの



まず、おれはそつと穴のなかをのぞきこんだ。なかは、まっ暗でよくわからないが、野獣のおいはしない。おれは、じつと暗がりのなかをうかがいながら、ようじんぶかく、そのなかへ足をふみ入れた。そのあとに、ジロが続いた。おれたちは、なんども頭を天井の岩に打ちつけた。

しばらくすると、穴の中が広くなって、立ったままでも歩けるようになった。かすかな光が、穴の口からはいりこんでくるほかは、まっ暗で、奥は先細りに狭まくなり、とうとう進めなくなった。

「これは、いいところを見つけたぞ。」

おれたちは、さっそく森の中から、ぬれていない枯れ枝を集めてきて、火を燃した。

まっ暗だったほら穴の中が、たちまちパツと明るくなって、あたりを照らした。

ほら穴のいちばん広いところは、ちょうど、おれたちの村の家の二倍の広さはある。天井からは、大小の岩がゴツゴツと突きだしていて、ちよつとぶきみだ。

「ベケのやつ、どこにいったのかな。」

おれたちは、たき火に手をかざして、ぐっしりぬれて、冷えきったからだをあたためた。

しばらくすると、どこにいったのか、犬のベケが、びしょぬれになって、穴の中にとびこんできた。やつは、ずぶぬれのからだを、なんどもゆすって雨水をおとすと、火のそばにからだを寄せて、腹ばいに寝そべった。

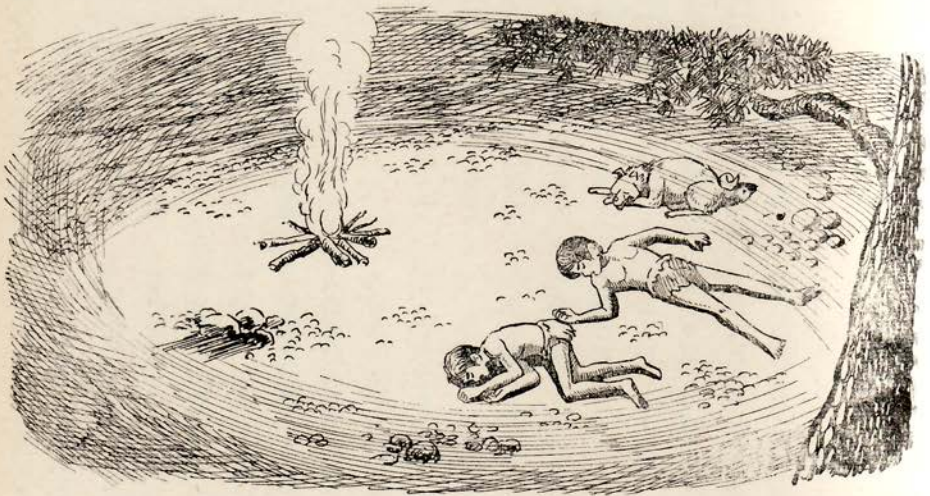
「ベケのやつ、うまく、おれたちをつれて帰ってくれないかなあ。」

ジロがいった。しかし、どうもあいてがベケでは信用が



魚を食ったあと、おれたちは、また川にとびこんで、向こう岸へ渡った。上流から流れてきた、根っこのついた大きな杉の木が二本、向こう岸の河原にのしあげられていたからだ。おれたちは、そいつを二本ともくりあわせて川に流し、それに乗って、川を下ろうというわけだ。

さいわいなことに、二本とも幹の中ほどで折れているために、枝や葉が一つもなくてたすかったが、はんたいに、根っこがごっそり四方にのびていた。おれたちは火を燃して、そのやっかいな根っこが、川に浮かべてもじやまにならないようにとってしまうのに、まる一日かかってしまった。それに河原から、川の中へ丸太をおしだし、そして、そいつをうまく二本とも、



フジづるでくりあわせるのに、ひどく手間どって、どうにか、その丸太を川に浮かべてとび乗ったときには、日の神さまは西の方にかたむいていた。

丸太の舟は、おれたちふたりとベケを乗せるのがせいっぱいで、どうにか浮かんで、プカプカ流れのって進みはじめた。ベケのやつは、丸太に乗るのを、すごくいやがった。逃げようとして、尻ごみするのを、むりやりに首輪を引っぱって乗せた。

おれたちは、二本の長い棒ギレで、丸太の舟を、どうにか川岸から流れの早い中心にこぎだした。丸太は、根っこの重いうしろにかたむいたが、それでも、ぐんぐん、ぐんぐん、流れに乗って、速さがありました。それでも、ベケは、不安